

第16回がん患者の抑うつと不安に関する研究会

- 開催のご案内 -

拝啓

時下、先生におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さてこの度、「第16回がん患者の抑うつと不安に関する研究会」を下記の要領にて開催することとなりましたのでご案内申し上げます。

諸事ご多用とは存じますが、何卒ご出席賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

敬具

日時 平成28年 9月22日(木) 19:00~20:00

会場 札幌コンベンションセンター

〒003-0006 北海道札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1 TEL:(代)011-817-1010

プログラム

座長 国立がん研究センター 支持療法開発センター

内富 庸介 先生

名古屋市立大学大学院 医学研究科 精神・認知・行動医学分野

明智 龍男 先生

第一部

緩和ケアにおける抗うつ薬の選択基準について

演者 東京慈恵会医科大学 精神医学講座

伊藤 達彦 先生

第二部

切腹文化からのパラダイムシフト

～職場に迷惑をかけるとは何か?～

演者 一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事
がん患者ソリューションズ(株)

桜井 なおみ 先生

研究会終了後、情報交換会を予定しております。

共催

がん患者の抑うつと不安に関する研究会
Meiji Seika ファルマ株式会社

第一部

緩和ケアにおける抗うつ薬の選択基準について

東京慈恵会医科大学 精神医学講座

伊藤 達彦

がんの診断初期から身体的・精神的苦痛に対しての緩和ケアが推進されているが、精神面へのケアがいまだ不十分であることが報告されている。精神的苦痛は抑うつと不安が主なものであるが、必ず改善するという介入方法が存在しないなか、患者各々の個別性を尊重しつつ薬物療法や非薬物療法的介入を試行錯誤して実践しているのが現実であろう。その中で「抗うつ薬」を使用すべきかどうか、使用する際どの薬剤を選択すべきかという臨床疑問が生じる場面がしばしばあると思われる。この問題に関してこれまで様々な視点で論じられてきているが、今回はそれらの確認をしつつ現時点での最良とは何かを考えてみたい。

第二部

切腹文化からのパラダイムシフト ～職場に迷惑をかけるとは何か?～

一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事 / キャンサーソリューションズ(株) 桜井 なおみ

「がんと就労」調査をすると、離職に関わる影響要因の上位にあがってくるものがある。

「価値観が変わった」「職場に迷惑をかけた」

2016年に実施をした、患者向け調査(N=300)では、就労継続に影響を及ぼした上位3つについて順位付け回答を得ている。第1位は「体力低下」、第2位は「価値観の変化」、第3位は「薬物療法に伴う副作用」、第4位は「迷惑をかけると思った」、第5位は「通院時間の確保が困難」となっている。

第1位の「体力低下」や第3位「薬物療法に伴う副作用」といった事柄は、身体・医学的な課題であり、医療機関が本来もっているリソースを発揮し、早めの段階から支持療法を介入することで軽減させることができる。また、第5位の「通院時間の確保が困難」は、企業側と交渉をし、治療計画とあわせた段階的な見直しをかけていく方向性がよく、社会側の課題である。しかしながら、「価値観の変化」、「迷惑をかけると思った」、「働くことがストレスに感じた」、こうした精神的なケアに対しては、いつ、だれが、どのような支援を行えばよいのか、明確ではないのが現状だ。また、「働き続ける」ためには、仕事へのモチベーションは重要であるが、中小企業経営者も従業員の「働くことへの思い」を重視する意向がわかっている(経営者向け調査2016結果から:一般社団法人CSRプロジェクト)。

命にかかわるような大きな事件、事故に遭遇をすれば、「風景が違って見える」ことは少なくない。特に、がんは、これまで「生活習慣病」という言葉で語られてきたため、多くの患者は診断直後に生活の見直しを考える。その一つの整理先として「仕事」はある。そして、「迷惑をかける」という感覚は、患者本人のみならず、配偶者も感じている。

精神的な変化によって、がん患者の三人に1人が罹患後に退職している中、「がんと就労」において精神領域の専門家はどのような関わりが考えられるのか?

このセッションでは、「Better World」を考えていくために、「働くがん患者への精神的な支援策」にはどのようなものが必要なのかについて、参加者全員で解決の糸口をさぐってみたいと思う。

自腹を切る、腹を割る、腹を割って話すと言った言葉にもあるような、自己責任を美德とする「日本型切腹文化」から「お互いさま」へのパラダイムシフトを、私たちはどう考えていけばよいのか、ともに考えたい。